新たなる戦い～第３章～

龍嵐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
新たなる戦い～第３章～

【Ｎコード】
Ｎ４２４４Ｎ

【作者名】
龍嵐

【あらすじ】
第３章～日常編～

ボンゴレ継承式から数年後を語る新たなる戦い～第４章～までで、どのような日常的な場面があったのだろうか・・・・

時期：継承式編終了から高校生になるまでの話

第3章～日常編～

いつもより早く目が覚めた。時間は朝４時を回ったところである。ボンゴレ１０代目・沢田綱吉はパジャマのまま家の屋根へと登って行った。

「ガウ」

「おはようナッツ」

アニマルリング－そのリングに炎を与えるとそれが出現する仕組みとなっている物。ツナは相棒の天空ライオン（レオネ・デイ・チエーリ）のナッツを出現させ、少し明るくなった空を一緒に見つめていた。

「なあナッツ」

「ガウ？」

「これから先には、一体何が待ってるんだろうな」

答えのないその質問にナッツは少し困った。主であるツナと同じ心を持つナッツにはわかるはずもない。

「未来は・・・わからないものだよね」

「何ブツブツ言ってやがんだ」

突然聞こえてきた声の方を振り向くと、スーツを着た赤ん坊が立っていた。

「リボーン」

そう、彼は世界最強と謳われた殺し屋・リボーンだった。

「いや、ただ早く目が覚めてナッツと話をしてただけだよ」

「そうか、なら準備しろ」

その言葉にツナは一瞬不安になりながら聞いた。

「な・・・なんの？」

「決まってんだろ、修業のだ」

「なあ――――――」

ツナの不安は的中していた。ツナは継承式の終わった後、これからは仲間を守るためにもっともっと強くなる決意をしていた。それをリボーンは聞き逃さなかったのだ。

「さっさとしろ」

「わかったよ」

ツナはため息をつきながら準備にかかった。

「まあ修業といっても今までに積み重ねてきた戦闘力を下回らなければいい」

「どういうことだよ」

「山本と同じだ、奴は野球をうまくなろうと練習するが、それは逆に今の実力を落とさせない練習といっているのと同じだからな」

「わかった」

ツナはそう言うと自分の修業法で特訓し始めた。

「じゃあ行くかナッツ」

「ガウ♪」

ツナはナッツと共にランニングを始めた。

走り始めてから2時間が経ち、ツナ達は公園で休んでいた。

「あれ、ツナ君？」

聞き覚えのある声に目が行くと、想い人の笹川京子がいた。

「き、京子ちゃん、なんでここに？」

「うん、ちょっと早く目が覚めてお散歩してたの、ツナ君は？」

「オレはナッツと軽いトレーニングをしてたんだ」

「ガウ♪」

ツナの足元から現れたナッツはちょこんと京子の肩に乗った。

「おはようナッツ君」

（くっ、ナッツの奴・・・うらやましい）

心が同じなため、ナッツも京子のことが好きなようだ。

「修業ってことはまた何かあったの？」

不安な表情を見せる京子にツナは否定の言葉をすぐに被せた。

「ただ、もうこの先誰も失いたくない、それはオレがもっと強くなって、みんな守りたい、そう思ったんだ」

ツナの決意あふれる言葉を聞いた瞬間、京子の心臓の鼓動が速くなった。

（あれ？私・・・どうしたんだろ）

「京子ちゃん？」

京子はハッとなり、話題を戻した。

「ご、ごめんなさい、ちょっと・・・」

「極限トレーニングだ――――――」

またもや聞き覚えのある声に振り向くと、京子の兄・・了平が走ってきた。

「むっ、京子と沢田ではないか」

「お兄ちゃん」

「そうか、沢田もトレーニングか、ならばオレと共に行こうではないか」

「あ、あのでももうすぐ学校が・・・」

「そんなものは後回しだ、行くぞ」

「そんなあ――――」

結局学校には遅刻し、怒られたツナであった。

第3章～日常編～（後書き）

とりあえず思いついたら投稿していきます。

標的１　みんなのクリスマス

時は中学２年生の１２月２２日。

「ああ－－－－、明日から冬休みだあ」

学校のＨＲが終わり、ツナはググっと背筋を伸ばした。

「あっ、そうだ」

ツナは何かを思い出し、山本、獄寺、京子のもとへそれぞれ向かった。

「獄寺君、２５日にオレの家でクリスマスパーティーやるんだけど来ない？」

「も、もちろん行かせていただきます」

パアッと輝いた目で獄寺が行った。

「じゃあ悪いけど獄寺君、ハルにもそう伝えてくれる？」

「いっ、アホ女もっスか、わ、わかりました」

少し嫌だったがツナの頼み事なのでしかたなく承った。

「いいぜ、２５日だな」

もちろん山本もＯＫの返事、残りは・・・

「き、京子ちゃん」
「どうしたのツナ君？」
「２５日にオレの家でクリスマスパーティーやるんだけど・・・京子ちゃんもど、どうかな？」
ツナは心臓バクバクで赤面していた。
「うん、いいよ」
よしっと心の中でガッツポーズをした。
「じゃあ２５日に」
「うん」
こうしてメンバー集まった。
ツナはみんなへのプレゼントを買いに並盛商店街へと出かけた。

「なんか京子ちゃんが喜びそうなものないかな～」
みんなへのプレゼントももちろんだが、今のツナの頭には京子へのプレゼントで頭がいっぱいだった。
「ん？」
ふとある雑貨屋に目が行った。特に高級そうでもなく、大型店でもない、しかしなぜか引き付けられるものを感じた。

ツナは気づいたら店の中へ入っていた。
「いらっしゃい」
そう言ったのは少し怪しいおばあさんだった。ツナは中を適当に見て回った。
「あっ、これ綺麗だな」
ツナが手に取ったのはピンク色でとても綺麗なブレスレットだった。
「そんなもんを選ぶなんて、彼女へのプレゼントかい？」
「い、いや、彼女じゃ・・・」
慌てて否定するツナの顔は真っ赤だった。しかし、その直後真っ赤な顔は真っ青な顔へと変化した。
「い・・・1万5千・・・」
高い、高すぎる。ひとつでその値段は中学生のツナにとって巨額だった。
「おや、やめるのかい」
「と、とても僕のお小遣じゃ・・・」
ハアとため息をつくツナにおばあさんはこう言った。
「じゃあただでやるよ、持っていきな」
ツナの目が点になった。

「い、いやそんな・・・」

いきなりこんな高いものをタダでくれるなんて。

「大切な人なんだろ、持っておいき」

心からのおばあさんの笑顔に一発でやられた。その後ＫＹＯＫＯの名前を刻んだブレスレットをもらった。

（この感じ・・・どこかで）

そう思ったツナはとりあえずお礼を言った。

「あの、ありがとうございました・・・あれ？」

頭を下げ、再び上げた時にはもうおばあさんの姿はなかった。姿だけでなく、気配も。

ツナは慌てて店を出た。

「守ってみなさい沢田綱吉、マフィアのボスの運命をも砕く君達の絆で」

再び店の中にいたおばあさん、しかし声は若い女性のそれだった。

やがていつのまにか、その雑貨屋は姿を消していた。

一方ツナは他の人のプレゼントを買いに、再び商店街を歩き回った。

ショッピング中にも、ふとあのおばあさんのことが頭を過ぎった。

（やっぱりあの人、大海の・・・・）

人知れず運命は動く！

標的2　ボンゴレファミリー編

時は中学2年生の12月25日。

深々と積もる雪。外は一面銀世界。ツナの母、奈々は鼻歌まじりにクリスマスパーティーの準備をしている。

「よし、出来上がり♪」

「さすがママンね、にしても多すぎない？」

ポイズンクッキング片手に苦笑するビアンキ。机には所狭しと特大料理がきらびやかに並べられていた。

「ツッ君のお友達たくさん来るっていうから・・・はりきっちゃって」

「あら・・・？何か物足りないような・・・・・？」

ビアンキは机を眺めた。

「ママン・・・ケーキが無いわ」

「あらっ、どうしましょう、忘れてたわ」

両手で頬をおおい、顔をしかめる奈々。

「私が買ってくるわ、少し待ってて」

「オレも行くぞ」

リボーンがビアンキの腕にすぽっと飛び乗った。

「ならあたしも行くわ」

「ランボさんも行くもんね」

「イーピンも」

「僕も」

ひょこっと現れ、ランボとイーピンとフゥ太は奈々の肩に飛び乗った。

「じゃあみんなで行きましょうか♪」

『はぁ～い』

階段から顔をのぞかせ、ツナの部屋に向かって奈々は叫んだ。

「ツッく～ん、ケーキ買いにいってくるわね～」

「はぁ～い」

寝起きのようなだらしない声が返ってくる。

「いってきま～す」

６人はケーキを買いに出掛けていった。

「母さん達遅いなぁ・・・」
ケーキを買いに行ったきり帰ってこない奈々達を、ツナは不安そうに待っていた。
ツナがため息をついたその時、玄関のチャイムが鳴った。
「こんにちは～」
ツナが慌てて玄関に行き、ドアを開けると、そこには京子が立っていた。
「きょっ、京子ちゃん、いらっしゃい」
「早く来すぎちゃったかな？」
少し照れ気味に京子が首を傾げると、ツナは赤かった顔がさらに赤くなった。寒さのせいか、ほんのり赤い鼻と頬がとても可愛かった。
「ぜっ、ぜんぜん大丈夫だよ」
あたふたしながらツナは京子を中へ案内した。
「すごいお料理！」
「母さんはりきっちゃって」
机の上の料理に感動する京子を鼻の下を伸ばしながら見つめるツナ。
「みんなは？」
「母さん達はケーキ買いに行ったきり帰ってこないんだ・・・」

「混んでるのかな？」

今ツナは京子と二人きり、緊張して舌が回らないツナは、顔を真っ赤にしながら必死に京子と話している。

1時間がたった。もう集合時間はとうの昔に過ぎていた。

「誰も来ないね・・・どうしたのかな？」

「ツナ君、外！」

外は吹雪、とても外を出歩ける状態じゃなかった。

「だからみんな来れないんだ・・・！どうしよう・・・」

その時、ツナのケータイが鳴った。山本だった。

「もしもし、山本？雪大丈夫？」

「わりぃ、親父の車で行こうとしたんだけど、道が混んでてな・・・遅れるけど行くからな」

風の音か、雑音がひどい。

「わかった、待ってるね」

「山本君？」

「車が混んでて…遅れるってさ」

「ハルちゃんと獄寺君も来ないね・・・」

その頃、ハルと獄寺は、たまたま鉢合わせ、一緒にツナの家まで歩いていた。吹き荒れる激しい吹雪、なかなか前へ進めない。

「くっそぉ・・・これじゃあ１０代目の家にたどり着くまで何分かかるか・・・」

「待ってください獄寺さん、はひ・・・はや、早いです！！」
どんどん先に歩いていく獄寺に、ハルは必死についていく。スカートから少し除かせた膝は痛々しいほど赤く染まっていた。

「あっ！！」

強い風が吹いたと思うと、ハルが持っていた袋が風に舞い、吹き飛ばされた。

「ツナさんへのクリスマスプレゼントがぁ！」

吹雪の中を逆走して行くハル。

「おいアホ女」

慌てて追いかける獄寺。

「あそこには、ハルが一生懸命編んだ手袋が」

「ちっ・・・」

獄寺は舌打ちすると、一緒に探した。半泣き状態のハル・・・。すると、獄寺が、公園の大きな木の上に、袋が挟まっているのが見つけた。

「あ・・・れか？」

「はひっ、あれです！あんな高い所に・・・・」

ハルは冷たくなった手のひらを握りしめると、木に足をかけ登ろうとした。

「おい、お前その格好で登れるかよ」

ハルは緑中の制服を着ていた。スカートで木に登るのはさすがに危ない。獄寺はハルの襟を掴んで木から下ろした。

「おっ、下ろさないで下さい」

「・・・・・・・・・・・・待ってろ・・・」

獄寺は自分が持っていた袋をハルに押し付けると、木に登り始めた。寒さが動きを鈍らせる。感覚の無い手を必死に伸ばし、獄寺が袋を握った瞬間、もろくなっていた枝が折れ、獄寺は地面に滑り落ちた。その衝撃で木に積もっていた雪が落ち、獄寺を埋めた。

「獄寺さん」

慌ててハルが雪をかき分けると、獄寺がむくっと起き上がった。

「痛っ・・・いてぇな・・・・・・・・・・ほらよ」

袋を差し出す獄寺。

ハルはそっと袋を受けとると、中から手袋を取り出して、獄寺の手にはめた。

「ありがとうございました」

「なっ、なんだよ・・・」

「あげます、クリスマスプレゼントです、獄寺さんに」「これはお前が１０代目に・・・」

「ちょっと失敗しちゃって、ツナさんにはあげらなかったんです、ちょうどよかったです、この出来じゃあ獄寺さんにあげるのがちょうどいいんです」

ぷいっと顔を背けながら照れ気味にハルが言った。すると、獄寺はハルが持っていた自分のクリスマスプレゼントをおもむろに開け始めた。中から出てきたのは手袋だった。獄寺はハルに差し出すが、ハルが手を出さなかったので無理矢理握らせた。

「オレも・・・手袋だったんだ」

「じゃあツナさんに？」

「１０代目にこのサイズじゃ少し小さすぎたんだ。てめえにくれて

やる」
ハルはそっと手袋をはめた。柔らかい手袋の感触、ハルは自分の頬に手をよせた。
「暖かいです」
「ふん・・・・・・・」
「獄寺さん」
「あぁん?」
「メリークリスマス」
そう言ったハルの笑顔に、獄寺は少し頬を染めた。獄寺は雪を払いながら立ち上がると、ハルに手を差し出した。
「行くぞ、１０代目がお待ちだ」
「はい」
雪は少しずつやみ始めていた。
続いた沈黙を破ったのはツナだった。
「き・・・き・・・京子ちゃん・・・・・」
「えっ?」
ツナが必死に声を張り上げると、京子は少し驚いたように聞き返した。ツナはそっとポケットから小さな手のひらくらいの袋を取り出

すと京子に差し出した。

「クリスマス・・・・・・・プレゼント・・・・・・・」

「わぁ、ありがとうツナ君。開けてもいい？」

「うっ・・・うん」

京子が優しく袋を開けると、中から綺麗なブレスレットが出てきた。
それにはK、Y、O、K、Oの文字が刻んであった。

「かわいい！・・・・・・・私に？」

「う・・・・・ん」

顔を真っ赤にしてツナが頷く。まともに京子の顔が見れず、顔を下げていると、首に何か暖かいものが触れた。

「あたしから、ツナ君へ」

京子はツナの首にマフラーを巻いた。

「マっ、マフラー！オレに？」

「うん、初めて編んだからちょっと不恰好だけど」

「ううん、そんなこと・・・あっ、ありがとう！」

京子も少し頬を赤らめた。沈黙が続く。

「あっあはははは・・・」

「なんか恥ずかしいね」

するとチャイムが鳴り響いた。

「おじゃましまぁす！ツナさぁあん！」

「１０代目、遅れてすいません」

頭に雪を積もらせた獄寺とハルが息切れ気味に入ってきた。

「よっ、ツナ」

続けて山本も入ってきた。右手にはいつものように寿司を持って。

「たっだいまぁ～パーティー始めるもんねぇ～」

「イーピン準備、ランボ手伝う」

ランボとイーピンが勢いよくツナに飛びかかった。

「待ってよ二人とも～」

フゥ太も慌ててついていく。

「ただいま、ツッ君」

「今帰ったぞ。」

「まったく、混みすぎよケーキ屋」

奈々達もタイミングよく帰ってきたようだ。

少し遅れたが、ここでもクリスマスパーティーが始まったようだ。

賑やかな笑い声は、真冬の空に美しく響いた。

メリークリスマス。

標的3　黒曜編

『はい、今日はこちら並盛商店街の人気ケーキ屋“ラ・ナミモリーヌ”からお送りします！』

快活な女性リポーターの声、クロームはふとその番組に見ていた。クリスマス一色の商店街、この店のクリスマス限定ケーキの紹介のようだ。ふわふわとした柔らかいスポンジにまんべんなく塗られた生クリーム、きらびやかにデコレーションされ、さらに中からも次々と出てくるイチゴの山。リポーターの口に入っていくケーキを、吸い込まれるようにしてクロームは凝視していた。

「クローム？そんなに近くで見ていては目が悪くなりますよ？」

ソファーで足を組み座っていた骸はクロームに声をかけ、ソファーをポンポンと叩いた。クロームは少し頬を赤らめると、骸の横へ座った。

「犬も近いです」

犬は床に寝転び、顔を近づけながら、ゲームをやっていた。

「ふぇい」

情けない返事をしながら、犬はゲームから少し顔を遠ざけた。

「骸様、お茶入れました」

千種がマグカップにレモンティーを入れて４つ運んでくる。

「犬、ガム噛みながら飲むなよ」

「わぁってら、うるへーな」

４人はテーブルを囲み、暖かいレモンティーを飲みながらテレビを眺めた。

『今日はクリスマスということで――――――』

“クリスマス”その言葉に犬と千種とクロームはちらっと顔を見合わせた。今日はクリスマス。３人は骸にクリスマスプレゼントを用意しているのだ。千種はマフラー、クロームは右手袋、犬は左手袋だ。今日の為に3人は以前から作っていた。

「そうだ、クリスマスパーティーの買い出しに行かなくてはいけませんね」

骸がすっと立ち上がると、３人も立ち上がった。財布係は千種、千種が財布を持ってくると、４人は商店街へ向かった。

赤、緑、青、白、綺麗な電飾が街を彩っていた。商店街のアーチをくぐり、先に進むと、さっきテレビで紹介していたケーキ屋があった。ちらっと見えたクリスマスケーキに思わずクロームは立ち止まった。一歩前を歩いていた骸と千種は、気付かずに歩いて行ってしまった。クロームがいないことに気が付いた犬は、振り返りながら舌打ちをし叫んだ。

「おいブス女、何してんらぁ、置いてくびょん・・・？」

クロームから反応が無い。犬は仕方なくクロームの所まで戻った。

「何してるびょん、早くしねえと置いてくぞ」

犬はクロームの頭を軽くどついた。

「あっ、犬・・・・ごめん」

ちらっと犬を見たが、目線はまたケーキの方へ。思わず犬も中を覗く。大きなクリスマスケーキがたくさん並んでいる。

「うまそう・・・らな・・・」

頷くクローム。犬はそっとポケットに手を入れると、中からお金を取り出した。

「４８０円・・・びょん、お前は？」

「５００円・・・」

手のひらにのせた小銭を二人で眺めながら、犬はため息をついた。クリスマスケーキは１８００円、二人の所持金を足しても足りない。犬が奥を覗くと、一回り小さなクリスマスケーキが見えた。

「・・・・・・・・！！」

犬はおもむろにクロームの手を握り、ケーキ屋に入っていった。

「犬…痛い」

クロームは犬に握られた手を持ち上げた。

我に帰った犬は、顔を真っ赤にしながら慌て手を離す。

「こっ・・・・こここここ・・・っこれびょん、９８０円！これなら買えんだろ？」

「・・・うん」

目を輝かせながらクロームは頷いた。犬とクロームはそっとショーケースの中のケーキを指差した。

『これ一つ！』

「二人ともどこ行ってたの？探したよ」

「どうしたんですか？」

うつむく犬とクローム。二人の手にケーキは無かった。

「骸さん・・・」

「はい？」

犬が目に涙を浮かべる。

「消費税ってなんなんらぁっっ！しょうひぜいいいいいいいいっっ！！！！！！！」

「どうしたの？」

「話してごらんなさい？クローム」

クロームも半泣きで目をうるうるさせている。

「ケーキ・・・買おうと・・・消費税・・・お金・・足りな・・・・・くて・・・・グスッ・・・」

途切れ途切れで聞き取りずらかったが、どうやら消費税の分お金が足りなかったようだ。骸と千種は顔を見合わせた。千種が鼻で笑うと、骸は面白そうに二人に笑いかけると、背中の後ろから、大きな箱を取り出した。大きく目を見開いて箱を見つめる犬とクローム。そっと骸が箱を開ける。

「これ・・・」

「いつ買ったんら」

中には大きいクリスマスケーキが入っていた。

「１８００円のやつらびょん！」

大きく頷くクローム。二人の目はケーキに釘付けだ。

「はぐれて探してる途中で買ったんだ」

「クロームが食べたそうにしてたんでね」
骸はクロームの頭をそっと撫でた。
「どうせ犬も食べたいって言いますし」
「骸さぁ～ん！」
犬は骸に飛び付いた。
「こら、犬、ケーキが落ちますよ」

4人は家に帰ると、早速料理を並べ、クリスマスの準備をした。テーブルの真ん中にケーキを置いて。
「さあ、食べましょう！」
『骸さん、メリークリスマス！』
3人は手作りマフラーと手袋を骸に渡した。
「おやおや、ありがとうございます」
骸はマフラーを巻き、手をはめると嬉しそうに3人に見せた。
「どうですか？」
「お似合いです」

「いいびょん」

「はい」

珍しく3人が同時に微笑んだ。特にクロームの笑顔は輝いていた。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、眠りについた3人に、サンタクロースはプレゼントを置いた。

「クフフフ・・・・・・」

不思議な笑い方のサンタクロースは、唇に人差し指をあて、小声で呟いた。

「メリークリスマス」

標的４　ヴァリアー編

今日はクリスマス。ルッスーリアは楽しそうにツリーに飾り付けをします。

「ちょっと～、誰か手伝いなさいよ」

あまりに不参加なヴァリアーメンバーにルッスーリアは少し怒っています。楽しいクリスマス、飾り付けもみんなでやりたいのです。

「ダメ～、今オレも飾り付け中だからぁ～♪」

ベルはマーモンにサンタの帽子を被せ、赤い洋服を着せ、クリスマスツリーの飾りを着けて遊んでいました。

「ベル、いいかげん邪魔なんだけど・・・ツリーの飾りはいいだろ」

「キラキラしてなきゃクリスマスじゃないだろ？マーモンがゲーム負けたんだし、オレ王子だし」

「意味わかんないよ・・・サンタの服だけって言っただろ」
ため息混じりにマーモンは飾りを取っていきました。サンタの格好はそのままで。さっきゲームをして、負けた罰ゲームのようです。

「ねえマーモン、サンタのおっさんって本当にいるの？」

「いるわけないじゃん、何歳だよベル」

「あら、サンタはいるわよ」

ピンと立てた小指を付きだしながらルッスーリアが言いました。

「いないよ」

「いないのか」

ルッスーリア完全無視で二人は部屋を出ていってしまった。

「まったく・・可愛いげの無いガキねぇ」

ルッスーリアは以前から考えていました。そんな可愛いげの無いヴァリアーのみんなに、自分がサンタになってプレゼントを配ろうと。

「・・・・・準備はバッチリよ・・・」

ルッスーリアは大きな布地の袋にプレゼントを詰め、肩に持ち上げました。

その夜。みんなが寝静まったころ、ルッスーリアの作戦は実行されました。こんなルッスーリアでも一応ヴァリアー。気配を消すのはお手のもの。まずはレヴィの部屋に侵入です。

（あらあら、キモチ悪い寝顔・・・）

ルッスーリアはそっと袋から少し大きめのマスコットを取り出しました。眼帯にパイナップルのような髪型、深緑の制服のそのマスコットはレヴィの大好きな妖艶な娘のマスコットでした。

「・・・ムグゥ・・・・・・妖艶だ・・・」

「ひっ！」

レヴィの寝言に思わず声をもらすルッスーリア。慌てて手で口をふさぎます。

（ビックリするじゃない、どんな夢見てんのよ、本当にキモチ悪いわね・・・このムッツリ！）

ルッスーリアは袋から油性マジックを取り出すと、レヴィのおでこに“ムッツリ”と書きました。それだけではつまらないので、顔に落書きもしました。

（ウフフフフ・・・ダメよ・・・面白すぎるわあ）

口を押さえて、ルッスーリアはレヴィの部屋を急いで出ていきました。

次はベルとマーモンの部屋です。布団をひっくり返しながら寝るベル。ベルのベッドの上に、ハンモックを吊るして寝るマーモン、まだサンタの服を着ています。

（二人とも寝てれば可愛いのよね・・・）

ふとベルのベッドの横を見ると、大きな靴下がかけられていました。

（あら、なんだかんだ言ってもやっぱり信じてるんじゃない・・・

サンタクロース・・・・・・)

ザシュッ――――――――――!!!!

ズザザザザザザ!!!

ルッスーリアが微笑みながら、靴下を開こうとすると鋭い小型のナイフが、袋から飛び出しました。間一髪、ルッスーリアはナイフを避けました。

(この子、サンタ殺す気満々じゃない!)

ルッスーリアが頬を膨らましながら、しぶしぶ袋からベルへのプレゼントを取り出し、靴下に入れようとすると、中から一枚の紙が出てきました。

(サンタさんへ、これを読んでるってことはナイフ避けられたんだね。なかなかやるじゃん。オレは新しいティアラが欲しいな、王子だし)

(・・・この子サンタを殺す気・・・?ふふっ・・・でもベルちゃんがティアラ欲しがってることくらい、お見通しよ♪)

ルッスーリアは靴下の中に新しいティアラを入れてあげました。ル

ッスーリアはベルの額に“堕王子”と書きました。全員の顔に落書きするつもりです。

次はマーモンです。マーモンにはプレゼントの袋いっぱいに詰め込んだ、5円チョコレートをプレゼント。現金じゃ夢が無さすぎるのでチョコレートにしたルッスーリア。きっと明日の朝マーモンはどうせなら金をくれと言うだろうとルッスーリアは思いました。ルッスーリアは最後にマーモンの両頬に“成金チビ”と書いて行きました。

さて、次はスクアーロの部屋です。考えてみると初めて入ったスクアーロの部屋、ルッスーリアは辺りを見渡しました。

（あら、性格のわりには綺麗じゃない・・・）

綺麗に整理整頓されたスクアーロの部屋に、そんな母親の目線のことを心の中で思いつつ、ルッスーリアはスクアーロの枕の横にプレゼントを置きました。

（スクアーロにはこれよね♪）

中身は最高級トリートメント。ロン毛のスクアーロは前から欲しがっていたのでした。スクアーロの寝顔に微笑しつつ、ルッスーリアが部屋を出ようとした瞬間。

ガシッ！！

「ん？」

ドカンッ！！

「きゃっ！」

スクアーロがルッスーリアの襟をつかみ壁に投げました。唖然とするルッスーリア。スクアーロは寝ながらルッスーリアに攻撃したのでした。

「ど・・・どんだけよ、痛いじゃないっ！」

ルッスーリアはまたペンを取り出すと、スクアーロの顔中に“カス鮫”と書き、部屋を出ていきました。

さあ、最後はＸＡＮＸＵＳです。息をのみ、ＸＡＮＸＵＳの部屋の前に立つと、中に明かりが見えました。

「・・・・？」

（起きてるのかしら？）

「ボス・・・・・・？」

そっとドアを開けるルッスーリア。すると、机に倒れるようにして寝ているＸＡＮＸＵＳがいました。

「あらあら・・・」

ルッスーリアはそっと毛布をＸＡＮＸＵＳにかけてあげました。仕事をしていたようで、机には沢山の資料が山積みになっていました。ルッスーリアは最後のプレゼントを袋から取り出しました。

「・・・・・・んっ・・・・」

すると、寝ていたＸＡＮＸＵＳが起きてしまいました。

「ボッ・・・ボス？」

「何してるてめえ・・・ふぁっ・・・・・・」

あくびをしながらＸＡＮＸＵＳはふとルッスーリアが置こうとしている箱を見ました。

「なんだそれは？」

「起こしちゃったかしら？ボスにクリスマスプレゼントを・・・今みんなにあげて回ってたの」

「ふん・・・くだらねぇ」

何も言わずにルッスーリアは箱を差し出しました。ＸＡＮＸＵＳは頭をかきながらルッスーリアの持っていたプレゼントを掴み、おもむろに袋を破きました。

「ウィスキーか」

「ボスが飲みたがってたやつよ」

両手を合わせながらルッスーリアは嬉しそうに言いました。ＸＡＮＸＵＳはウィスキーをコップに注ぐと、口に運びました。

カラン

グラスにあたる氷の音。ＸＡＮＸＵＳはグラスを机に軽く置くと、ルッスーリアを見ました。

「？」

ＸＡＮＸＵＳはもう一つグラスを取り出すと、氷を入れ、ウィスキーを注ぎました。

「てめぇも飲め」

ルッスーリアは優しく微笑み、グラスを手にとり、ＸＡＮＸＵＳに差し出しました。

「・・・？」

「Ｍｅｒｒｙ Ｃｈｒｉｓｔｍａｓ ボス♪」

「フン・・・・・・」

グラスとグラスがぶつかり、透き通った美しい音が部屋に静かに響きました。

次の朝、洗面所ではレヴィとベルとマーモンとスクアーロは、必死に顔を洗いましたとさ。

「めでたし　めでたし・・・ウフフフフ・・」

『ルッスーリアぁあああ！！！！！！』

「あら？ばれてた・・・？」

標的5　クリスマスプレゼント

時は12月26日。クリスマスパーティーの次の日の出来事である。

「ふぁ～あ」

大きなあくびをしたツナはして起きた。

「ん？」

ツナは枕元に置いてあった箱に気づいた。気になって開けてみると、そこには携帯電話が入っていた。

「これって携帯電話？」

「やっと起きたかツナ」

いつのまにかちょこんとベットに座っていた赤ん坊に気がつく。

「オレとママンからのクリスマスプレゼントだ、大事に使えよ」

「え？いいの？」

「ああ」

リボーンはいつもの冗談などではなく、純粋な笑顔だった。

「ちなみに今アドレス帳に載ってるのは家光、ママン、オレだけだからな、友達や守護者にでも聞いてこい」

リボーンはそう言うと部屋を去った。

とりあえず携帯を持ち、散歩へと出かけた。
公園で携帯を手に、ブランコをこいでいた。

「１０代目～」

聞き覚えのある声に顔を向けると、獄寺がいた。

「やあ獄寺君」

「あっ、１０代目、携帯買ったんですか？」

「うん、母さんとリボーンがね」

「１０代目、アドレス教えてください」

ツナは断る理由もなく、アドレスを交換した。

「あれ、ツナと獄寺じゃねえか」

「山本」

アドレスを交換している時にちょうどそこを通りかかった山本がこちらへ来た。

「あれ、それ携帯じゃねえか？」

「う、うんそうだけど」

「いやあ、実はオレもクリスマスに親父が買ってくれてさ、ツナのアドレス教えてくれよ」

ニッコリしながら山本は携帯を出した。

「てめえ、いきなり現れたと思ったらふざけたことぬかしやがって、１０代目がアドレスを教えていいのはオレだけだ、てめえはすっこんでろ」

「いいじゃねえか、獄寺のも教えてくれよ」

相変わらずド天然な山本は獄寺の怒りもそっちのけである。

結局２人と交換した後、それぞれ別れて行った。

ツナは１人公園に残り、いつまでもボーっとしていた。

（やっぱり一番知りたいのは・・・・）

ツナの脳裏には、想い人の顔が浮かぶ。

「ツナ君？」

「わあ」

ドサッ！

脳裏に浮かんだ少女の声にビックリしてブランコから落ちてしまった。

「大丈夫ツナ君？」

「う、うん」

まさかこんなにすぐ出会えるとは思わなかった。

（聞くなら・・・今だ）

「ここで何してたの？」

「えっ？」

聞こうとした手前、あちらから言葉がかかってしまった。

「あ、うん、ちょっとボーっとしたくて」

結局普通に話しをして帰ることになってしまった。

「ハァ、自分で自分が情けない」

ツナはため息をはきながらベットに転がり込んでいた。

（ただ聞くだけなのに、なんでできないかな）

結局考えても何にもならなかった。ベットで横になっていたためか、ツナはいつのまにか寝てしまっていた。

プルルルル

プルルルル

「わあ、なんだなんだ？」

いきなりの音で慌てたが、すぐに携帯電話だとわかった。

「ビックリした、誰からだろ」

携帯の画面を開いてみた。だが、そこには知らない番号からの電話がかかっていた。

最初は躊躇したが、出ることにした。

「はい、もしもし」

「・・・・・・」

相手からの反応がない。喋ってくる気配がないので、もう一度話し掛けた。

「もしもし？」

「・・・・ツナ君？」

「えっ、その声は・・・京子ちゃん？、でもどうしてオレの携帯に？」

「さっきリボーン君が教えてくれたの、これがツナ君の番号だからかけてみたらって」

（あいつ・・・・）

なにはともあれ、うれしくてたまらないツナだった。

それから京子と楽しく話し、時間を忘れるほどだった。

それをドアのところから見ていたリボーンは楽しそうであった。もちろん会話に夢中なツナはそれには気づかなかった。

ツナにとって一番のプレゼントであった。

標的６　お正月

時は１月１日・元旦。

いつも通りツナは目覚め、朝ご飯を食べていた。

「ツナ」

とそこへリボーンがやって来た。

「なんだリボーン？」

「メシ食い終わったら外に来い」

「えっ、なんでだよ？」

「ボンゴレ式ファミリー対抗正月合戦をやるぞ！」

そのリボーンの一言にご飯をブッと吐いてしまった。

「はぁ、またあれやるのーーーーー？」

「そうだぞ、ちゃんと来いよ」

ツナは心の中で思った。絶対行かないと。死んでも行くかと。

「なら今すぐ殺してやろうか？」

ギクッ！！

（こいつはまた人の心を・・・）

笑みを浮かべながら銃口をツナに向ける。

「わ、わかったよ、行くよ、行けばいいんでしょ」

ツナはしぶしぶ承諾した。また負けたら罰金１億とかになるんだろうと思った。

「ハァーーーーーー」

ツナは大きいため息をつき、ご飯を食べた。

ツナはご飯を食べ終わり、外へ出た。

「ツナ君、あけましておめでとう」

「１０代目、あけましておめでとうございます」

「なっ、京子ちゃんに獄寺君！？」

「よおツナ」

「極限にめでたいな沢田」

「なっ、お兄さんに山本も！？」

次々といつもの仲間が集まってきた。

「そろってきたな」

「リ、リボーン」

ちょこんとリボーンはツナの頭へと飛んできた。

「今回はいったい何をやるんだよ？」

「まあ待て、他にもまだ来てない奴らがいるからな」

＝数分後＝

ツナ、了平、ランボ、獄寺、山本、京子、ハルが集結。

「ボス」

突然後ろから声がしたので振り返るとクロームと千種、犬の姿があった。

「クローム、どうしてここに？」

「へん、アルコバレーノが来い来いってしつこいから来てやったんだびょん」

質問に答えたのはクロームではなく犬だった。

「めんどかったけどね」

相変わらず千種はめんどくさそうにメガネをクイッと上げる。

「リボーン、クローム達まで呼んだのか？」

「ああ、それと奴らも呼んどいた」

「奴ら？」

「う〝お〝お〝お〝お〝い！！！、オレ達を呼び出していったい何のつもりだぁ！？」

「久しぶりだな弟分」

キャバッローネファミリーのボス・ディーノ、そしてボンゴレ独立暗殺部隊ヴァリアーまでもが現れた。

「な、なんでディーノさんやヴァリアーも――――！？」

「よし、そろったな、これよりボンゴレ式ファミリー対抗正月合戦のスタートだ！！」

標的7　チーム分け

「い、一体何をやるんだよ？」

「これから2チームにわけてボンゴレ式双六対決をやる」

「ハァ？」

ツナ達はまったくわけがわからなかった。いきなりディーノとヴァリアーが現れた何をしようと思った矢先、たかが双六とは・・・。

「う〝お〝お〝お〝お〝い！！！そんなくだらねえことで呼んだのかぁ！？」

「ししししっ、まあいいじゃねえの、楽しもうぜ」

激怒するスクアーロをベルがなだめた。

「クロームとマーモンの幻覚でリアル双六をやる」

「リアル・・・双六？」

「巨大な双六の幻覚を作り、お前達がコマの指示通りのことをやるだけだ」

「ふん、金にもならないし、そんなのやってられないね」

相変わらず金には目がないマーモンは鼻を鳴らし、つまらなそうに

答えた。

「そうそう、負けたら1億の罰金だから勝てばもらえるぞ」

リボーンの言葉にマーモンはピクッと反応した。

「まあいいだろ、暇つぶしにはなるだろうからね」

まんざらでもなさそうな口調になった。

「じゃあ行くよクローム髑髏」

「うん」

2人の幻覚は全員を包みこんだ。

目を開けると、そこは双六のボードの上だった。

「何コレー！？」

「んじゃあ始めるぞ、まずチーム分けからだ」

現在いるのはツナ、了平、ランボ、獄寺、山本、クローム、、犬、千種、ディーノ、京子、ハル、スクアーロ、マーモン、ルッスーリア、レビィ、ベルの１６人。

「まあこの１６人ならだいたい決まってるな」

「えっ！？」

「発表するぞ、チームボンゴレはツナ、獄寺、山本、了平、ランボ、クローム、京子、ハルだ、チームヴァリアーはディーノ、スクアーロ、マーモン、ルッスーリア、レビィ、ベルフェゴール、城島犬、柿本千種だ」

チーム分けは終わった。しかし、それに対し、不満をぶちまける者もいた。

「おい、何でオレらまでやらなきゃならねえんだびょん!?」

「めんどいんだけど」

「じゃあしょうがねえ、お前ら帰っていいぞ」

(えっ?)

リボーンはあっさり、2人を帰してしまった。

「そうなるとヴァリアーチームは人数が足りねえな」

「う〝お〝お〝お〝お〝おい、そっちのうちの2人は一般人だろうが、これで構わねえぞお!!」

いつの間にかスクアーロがやる気になっている。

「そういやそうだったな、じゃあ始めるか!!」

標的8　料理対決

ボンゴレ式双六大会、始まる。
目の前に広がるは巨大なボード板。ツナ達はコマといったところか。
ルールは互いの大将がサイコロを振り、出た目だけ進んだ後、マスの指示に従う。
マスの指示はほとんどが対決マスであり、勝負に勝つとポイントがもらえる。先にゴールしたチームもポイントがもらえ、2チームがゴールした時、ポイントが高い方の勝利。
ちなみに先にゴールをしても、後のチームが対決マスを踏んだ場合、勝負はしなければならない。

「さあ、チームボンゴレの先攻だ。ツナ、サイコロを振れ」

「えっ、オレが？」

「あたりめーだ、ボスはお前だぞ」

ツナはしぶしぶながらも大きいサイコロを振った。
出た目は4。チームボンゴレは4マス進んだ。

「なになに、お料理対決？互いのチームは1人の代表者を決め、料理をする、勝敗は審判に委ねられる」

「ツナが今言ったとおりだ、互いのチームは代表者を1人出し、う

まいオムライスを審査員に食わせた方が勝ちだ」

チームボンゴレの方はだいたい出す人間は決まっていた。京子かハルである。その末京子に決定。
チームヴァリアーはというと・・・・・。

「う〝お〝お〝お〝お〝おい、誰が出るんだあ！？」

「オレ王子だからんなめんどくさいことしねっ！」

「ならばオレが・・・」

なぜか自信満々に前に出るレヴィ、しかし・・・

「ハイハ～イ、あなたには無理よレビィ、ここはもちろんアタシが行くわ～」

レビィをそっちのけにし、ルッスーリアが出ることに決定した。

「京子、お前ならば極限に大丈夫だ、しっかり行け」

「京子ちゃん、ガンバって」

「うん」

了平とツナの激励に答え、京子が行く。

「う〝お〝お〝おいルッスーリア、負けたら八つ裂きだぞお！」

「まあなんだかんだいって、いつもヴァリアーでご飯を作っているのはルッスーリアだからね」

こちらもスクアーロとマーモンの激励？に答え、ルッスーリアが行く。

「制限時間は２０分、バトルスタートだ！！」

バトル開始後、京子はすかさず理を開始した。

「京子ちゃんなら大丈夫ですよね！？」

「当たり前だ、未来での京子の料理は極限にうまかったからな」

「京子ちゃんファイトです」

未来での家事担当をしていた京子の料理の腕前は全員わかっていた。そのためチームボンゴレには不安という文字はなかった。

一方チームヴァリアーは・・・・。

「ランランララ～」

ルッスーリアは料理をまだ作らずに踊っていた。

「う〝お〝お〝お〝お〝おい、このオカマヤロー、なめてっとぶっ殺すぞぉ！！」

「まあまあ慌てないの、同時に作っちゃったら一方が冷めちゃうじ

ゃないの」

「まあここはルッスーリアにまかせようぜスクアーロ」

ベルがなだめるとスクアーロは舌打ちをして引き下がった。

「じゃあ審査員を紹介するぞ」

そう言って現れたのは青いおしゃぶりと赤いおしゃぶりを下げた赤ん坊だった。

「コ、コロネロに風！？」

「なんかおもしろそうだから来てみたぜ、コラ！」

「私が呼ばれてもよろしかったのでしょうか！？」

とかなんとか言っている内に京子の卵料理が完成に近づいていく。

「そろそろ私も始めようかしら！？」

＝数分後＝

「できた！」

京子は満面の笑顔でそう言った。皿の上にはとてもおいしそうなオムライスが・・。

そして審査員であるリボーン、コロネロ、風の前に並ばれた。

「さすが京子だぜ、コラ！」

「これはとてもおいしそうですね」

3人のアルコバレーノもその料理に興味津々である。

「うめえぞ京子」

「このフワフワした感触もいいぜ、コラ」

「一緒に含まれているとろけたチーズもとてもおいしいですね」

そしてその料理はツナ達やヴァリアーにも味見された。

「おいしい！！」

「極限にうまいぞ京子！！」

「う〝お〝お〝おい、うめえじゃねえか！！」

「ししっ、こりゃもしかしたら・・・」

「ウム、ルッスーリアが負けるかもしれないね」

ツナ達だけでなく、ヴァリアーにも評価はとてもよかった。

「んじゃあ続いてルッスーリアだぞ」

「んっふっふ～、お待ちどう様～」

ルッスーリアの持ってきたオムライスを皆が口にする。

「こ、これは・・・」

「勝者はチームヴァリアーのルッスーリアだぞ」

リボーンが高らかに言い放った。

「京子のオムライスは確かにうまかったが、ルッスーリアのはプロ並のレベルだったぜ、コラ！！」

「そうですね、京子さんのオムライスは一般から見れば最高峰のレベルですが、ルッスーリアの方はまさに世界レベルといったところでしょう」

さすがに長い間ヴァリアーの家事をしていたルッスーリア、長き経験が勝敗をわけたのだろう。

「う〝お〝お〝お〝おい、よくやったぞルッスーリア！！」

こちらでも勝利の雄叫びを上げる。

「あなたのオムライスもおいしかったわ～、ただ経験が足りなかっただけよ～」

「悔しいけど私の負けです、今度料理教えてくれませんか？」

「ええ、いいわよ」

二人は笑顔で握手をし、理対決は幕を閉じた。

さすがはチームヴァリアー、一筋縄ではいかなかった。

標的9　レースバトル

まずはチームヴァリアーの先制、しかしここで終わるツナ達ではない。
続いてチームヴァリアーの番。
「う〝お〝お〝お〝お〝ら〝あ〝あ〝あ〝ああ！！！」
巨大な叫び声と共にスクアーロがダイスを振る。出た目は6。
「ガチンコレースバトルだとぉ！？」
「ガチンコレースバトルとは、チームの代表1人が超ロングなレースのタイムを競うバトルだぞ」

「レース？」
「ルール特にない、走るもよし、炎の推進力を使うのもよし、好きに行け」
「えっ！？乗り物とかはないのか！？」
「ああ」
要するに自分の力でレースを勝ち抜くという感じである。
「乗り物がないんじゃ、出るのは決まってるな」

「うむ、極限にあいつしかおらん」

「えっ！？」

山本と了平の言葉に１人だけ疑問を浮かべる人物がいた。

「おまかせしましたよ、１０代目」

「はあああ、オレーーーーーー！？」

ツナであった。

「ど、どうしてオレが！？」

「何でって言っても炎の推進力が１番あるのはツナだしよ」

「というわけでお願いします１０代目」

ニカッと獄寺は笑い、ツナを後押しした。

「ツナさんファイトです」

「ガンバってねツナ君」

（ノオオオオオオオ）

京子とハルにも応援され、これはもうやるしかないのか、とツナは

冷や汗をダラダラかいていた。

「う〝お〝お〝お〝お〝お〝おい、こん中で一番速いのは誰だぁ！？」

「炎を推進力っつってもオレ達は戦闘用だしな」

「じゃあ1人しかいないわねえ」

「オレか「あなたじゃないわよレビィ」

またもやでしゃばるレビィを遮り、ルッスーリアが言葉を被せた。

「ム・・・」

スクアーロ、ベル、ディーノ、ルッスーリアの視線がフワフワと浮いている赤ん坊に向けられた。

「まさか僕にやれって言うんじゃないだろうね」

表情は変わらないがマーモンの言葉には少しの威圧が感じられた。

「ししっ、当たり」

「てめえしかいねえだろ」

「ヤレヤレ」

ハァとため息をつき、しかたなく出場することに決めた。

レースバトルはツナＶＳマーモンに決定した。

「それではレースを開始するぞ」

チーム代表であるツナとマーモンが並ぶ。

「ツナ君ガンバって」

「極限に飛ばせ！！」

「う〝お〝お〝お〝お〝おおい、勝ってこいよぉ！」

「ししっ、でも生意気だからもう１回くらい負けたら！？」

互いの激励？を受け、レースがスタートする。レースは総距離５０キロメートル、曲がりくねった道もあり、ショートカットは見えない壁があり不可能。また林の中やトンネル、洞窟、中には真っ直ぐではなく、垂直方向に進む場所もある。

「いくぞ、３、２、１、スタート！！」

リボーンが勢いよく旗をかざすと、ツナは即座に炎を放ってスタートする。マーモンも同じくスタートするがツナにはまったく及ばない。

互いのチームは配られた小型テレビでツナとマーモン、そしてマップを見ることができる。

「ふうん、さすがに速いね、でも急ぎすぎると痛い目見るよ」
マーモンは謎の言葉を残し、ツナよりは遅いが、なかなかのスピードでレースを始める。

「よし、かなりのスピードだな、こりゃ勝てるんじゃねえか！？」
「１０代目が負けるはずねえだろ！！」

獄寺の言う通りすでにツナとマーモンにはかなりの差が出ている。
優雅に飛んでいるツナが何かに気づいた。

「！！」

そのまま空中で止まり、周りを見回した。

「さっそく、垂直方向か！？」

ツナの目の前にそびえ立つてっぺんの見えない塔、抜けるとこがないと見えると通り抜けのコースでないことがわかった。
再び炎を放ち、塔の側を垂直方向へ進み始めた。

「う〝お〝お〝お〝お〝おい、負けてんじゃねえかぁ！！」

「いや・・・」

「まだわからないわよ～」

ベルとルッスーリアが発したこの言葉、それが現実となる。
渡された小型テレビは選手であるツナ、マーモン、そしてマップ状を見ることができ、２人の位置が点滅しており、どこまで進んだかわかるようになっている。

「なっ、どうなってんだコリャ！？」

ツナは垂直方向に進んでいるため、点滅位置が変わらない。しかし、マーモンが垂直方向ではなく、塔のある地点を通り越したのである。

「確かショートカットはできねえはずだろ」

「極限どうなっておる！？」

そこに気づいたのはスクアーロだった。

「幻術かぁ！？」

そう、マーモンは本来ないはずのところに垂直方向の塔を立て、ツナを足止めしたのだ。ツナは直接塔に触れようとせず、そのまま垂直方向に移動したため、幻覚とは気づかなかったのだ。

「くっ、１０代目、気づいてください！」

しかし、獄寺の願いもむなしく、ツナは上り続ける。

標的１０　沢田綱吉　ＶＳ　マーモン

真っ直ぐコースを行くマーモンとあるはずのない塔を垂直方向へ飛ぶツナ。
差はみるみる広がっていく。

（おかしい、いくらなんでも長すぎる）

垂直方向に進み始めてから１０分以上経つ。

（！！、まさか）

ツナは途中で飛ぶのを止め、塔をジッと睨んだ。

（この塔、本当に存在しているのか！？）

「ハアアアア！！！」

ドゴオオオオン！！

「やはり幻覚か」

ツナの渾身のパンチは見事に幻覚を破壊した。

「１０代目、やっと気づいてくれた」

「だが差がだいぶ広まっちまったな」

「ツナ君」

「ツナさん」

急いで塔を下りようとしたツナだったが、それを止め、考えるように静かになった。

（ツナの奴、やる気だな）

ツナの考えを見破ったリボーンの顔に笑みが浮かんだ。

「よし！！」

ツナは勢いよく炎を発し、真っ直ぐ進み出した。

「どうしたんだツナ！？」

「そ、そうか！！」

獄寺の大きい声に山本やヴァリアー達も振り向いた。

「なぜ１０代目があっさり幻覚に引っ掛かったかよく思い出してみろ」

「う～ん、超直感が発動する遥か手前でストップしちまったからか！？」

「当たりといやあ当たりだが・・・」

「ししっ、わかったぜ、レースの前にアルコバレーノが説明してただろ、レース中に垂直方向を進む場所もあるっつってたからそれで

不思議にも思わずに引っ掛かったっつーことだろ」
「ああ、正解だぜ、そして１０代目が下りずに真っ直ぐ進んでったのは、その先にも本来の垂直方向コースがあると予想したからだ」
「そっか、先に同じような本物の塔があればいちいち上らなくてもいいってことか」
「ああ、さすが１０代目だ」
そしてスピードは遥かにマーモンを上回るので、２人の距離は縮まっていく。
そしてついに―
「あれは！？」
ツナが遠くに見たものは、垂直方向を上るマーモンの姿だった。ついに２人が並んだのだ。
「ムムッ、もう来たのか！？」
「追いついたぜ」
「さすがだね、じゃあここが正念場、この塔を下ればゴールだよ」
「だが、そうはさせてくれないんだろ！？」
「もちろん」
フッとマーモンが姿を消し、あたりが霧に包まれていった。そして

その霧の中から何体ものマーモンが現れた。

「さあ」
「どれが本物か」
「当ててみなよ」

「ふっ」

「何がおかしいんだい！？」
「本物はここにはいないんだろ、本物のマーモンはすでにレースに戻っている！！」

つまりこの霧と分身はただの劣り。ここに来て超直感はが発動した。

「！！、見破っているなら話が早い、抜けてみなよ」

「ああ」

もはや見破った霧ごとき、ツナの相手ではなかった。

「やれやれ、また幻覚に引っ掛かってくれるとはね」

すでに塔を下り始めていたマーモンは余裕の表情だった。

ドゴオオオオン！！

「ムムッ」

（幻覚が破られた！？）

ツナはＸ　ＢＵＲＮＥＲで空間ごと吹き飛ばしたのだ。

「もはや幻覚を作っている暇はないようだね」

マーモンもスピードを上げ、塔を急降下する。ツナもそれを追うように行く。

そしてマーモンが地上へ辿り着いた。ゴールは目前。

そしてその直後ツナも地上へ。

「ゴーーーーーール！！」

標的１１　運命（さだめ）

「勝者、チームボンゴレ・沢田綱吉！！」

「さすが１０代目！」

「やったなツナ」

一瞬の差で勝利したのはツナだった。負けたマーモンの方もあまり悔しがっているようではなかった。

「う〝お〝お〝お〝お〝おい、このままじゃあいられねえ、次いくぞぉ！！！」

再び互角からのスタート。勝っては負け、負けては勝っての連続だった。

そして最終的に勝利したのは・・・・

「優勝は、チームヴァリアーだぞ！！」

「う〝お〝お〝お〝お〝おい、リング争奪戦の借りは返したぞぉ！！」

「約束通り金はもらえるんだろうね」

「ししししっ、もう１回争奪戦やるか！？」

「んだとナイフ野郎！！！」

興奮する獄寺をまあまあと山本がなだめた。

「リ、リボーン、負けたら何かあるのか！？」

恐る恐るツナが嫌な予感をしながらボソッとつぶやいた。

「いや、別に何もねえ」

というリボーンのあっさりした回答に違和感を感じた。

「ははは、まあなんにせよ楽しかったじゃねえか」

「こんのお気楽野球バカが、悔しくねえのか」

「まあまあ獄寺君」

ほんの前まで目の前にいるヴァリアーとは殺し合いをしたというのに、今では仲良くとはいかないが、少なくとも敵には見えなかった。

そしてツナが1人橋を見上げているリボーンに気づいた。

（リボーン？何見てんだ！？）

ツナもリボーンと同じ方向を見た。その先には謎の2人が橋の上からこちらをジッと見ていた。

（誰なんだろ、リボーンの知り合いか）

「あれがボンゴレ10代目ファミリーか、てんでガキだな、それにボンゴレ最強といわれるヴァリアーもあまり強そうには見えんが・・・」

【シリウス：メテオーラファミリーのボス、後の天下覇王群】

「年齢は子供よ、それにヴァリアーもあくまでボンゴレ最強なだけ、世界最強じゃないわ」

【ミラ：ステラファミリーのボス、同じく後の天下覇王群】

「ちげえねえ」

橋の上にいた2人はツナ達を見てそう思った。

「いっちょおちょくってみるか」

「「「「「！！！！！」」」」」

（な、なんだ！？）

（か、体が・・・）

（動かねえ）

とつじょ京子とハル、リボーン以外の全員の動きが止まった。

「み、みんなどうしたの？」

「何が起きたんですか」

ツナ達が動かなくなり、不安になり始めた。

「落ちつけ京子、ハル」

リボーンは2人をなだめ、橋の奴らに視線をうつした。

（メテオーラとステラか、なんで奴らが日本に）

「くくく、見ろよミラ、これしきの力で動けなくなってやがるぜ」
「でもアルコバレーノには効いてなさそうね」
「ああ、さすがは勢力候補の一角を担うだけあるじゃねえか、遊びはこの辺にして帰るか」
「そうね」
2人の姿は一瞬で橋の上から消え去った。その瞬間全員の体が動くようになった。
「な、なんだったんだ今のは！？」
「静止の・・・波動！？」
「リ、リボーン、さっきの2人の仕業か」
「ああ」
リボーンはツナの質問に静かに一言そう言った。

標的１２　京子の夢

時は1月8日、冬休みも終わり、3学期を迎えることになった。

あの時の（おそらく）静止の波動を放った2人についてリボーンは何も言わない。別に危害を加えてもないので気になるというものではなかった。

1人ツナは屋上でボーっと景色を眺めていた。

とそこへ屋上へ繋がる階段から足音が聞こえた。

（獄寺君か誰かかな！？）

「あっ」

「いた」

現れた人物はツナへと歩み寄ってきた。

「おはようツナ君」

「京子ちゃん、おはよう」

想い人の笹川京子、未だ進展はないが、確実に距離は近づきつつあった。

「何してるの？」

「うん、今までの戦いをね」

「！！」

今までの戦い、黒曜、ヴァリアー、ミルフィオーレ、シモン、数々の敵と対峙し、命を何回も落としかねた。
もちろん未来で自分がマフィアということを聞いていた京子もさほど驚いてはいなかった。

「よく思うんだ、またああいう戦いが起きた時、毎回のように仲間を守れるのかなって・・・」

「え？」

「オレは継承式で１０代目ボスの座を継いだ、もうこの運命からは逃げられない、戦いが起きたら、京子ちゃん達を巻き込みかねない、たとえ何も知らせなくても初代ファミリーの継承の時のように、オレと関わりを持っているせいで人質に取られたり・・・」

いつも見るツナの顔じゃなかった。ここまで哀しい表情を見せたことがあっただろうか・・・。

そんなツナを見ていると胸がどんどん苦しくなっていくのがわかった。

「わ、私が・・・」

「えっ？」

「私がツナ君を支える、いつもツナ君は私達を守ってくれた、だから・・・」

「でも今までだってオレは京子ちゃんやハルには支えられてきた」

「え？」

黒曜戦の小言弾で聞いた声、ヴァリアー戦のお守り、そして未来での側にいてくれたことなど、２人はさまざまな場面でツナの支えとなっていたのだ。

「オレはもう正式にボスになった、これからははマフィア間の大戦争だって起こるかもしれない、もしそれほどの事が起こったら、オレには・・・・みんなを完全に守れる自信がない、だから・・・」

言葉の続きを言おうとした瞬間、自分の胸に何かを感じた。

「京子・・・ちゃん？」

京子はツナの胸に頭を当て、服をキッチリと掴んでいた。

「だからこそ、私はツナ君の支えになりたい、ずっと・・・」

ツナはそれから言葉を失い、ただただ目の前にいるかけがえのないたった1人の少女を目に焼き付けていた。

「はっ」

京子が目を開くと、そこにはいつもの光景があった。窓から入る朝日、聞こえてくる鳥の声。

「夢？」

しかし、なんとも現実に近い夢であった。たとえ現実だったとしても何故自分があのような行動に出たのかはわからなかった。

そしていつものように登校すると、そこにはいつもの沢田綱吉がいた。

「あ、おはよう京子ちゃん」

京子も笑顔でそれに答えた。

（もしかしたら、私は・・・）

標的１３　世界の政府

円卓状の机にとてつもない威圧感を放つ面々が座っていた。
場所は日本のある会議場のようなところである。

「リングが発見されてからというもの、元々勢力のあるマフィア達は更なる力をつけてきている」

「確かにそうだがリングを持つ条件としては我々も同じではないか」

「・・・・・・・」

「日本ではあまりそのような輩はいないように感じるが・・」

「だからこそ我々日本政府も数が少ないのではないか」

話の内容を細かく見てみると、その男達はこの世の秩序を守る警察の上の立場、政府の人間のようだ。リングや匣の流出、そしてそれの使用により世界のマフィア達はその暴動を広げているらしい。

そして先程黙っていた男が口を開いた。

「日本とて、甘く見てはならんぞ、ワシの直感によると・・・この近くにも」

その男は自分のことを『ワシ』と呼んでいるが、見た目は周りにい

る人達と比べて遥かに若い。しかし、他の者と同様に威圧感はある。

【イタリア】

「やはりイタリアはマフィアの数が多く、それだけ被害もでかい」

「中にはそのようなマフィアを退治するマフィアの存在をしばしば耳にするが・・・」

「たとえ一般人に被害を与えず、その地域を守るためのマフィアだとしても所詮は犯罪者ではないのか」

「だがそれでそのマフィア達を逮捕したとしたら、その地域の者達が反発に出るやもしれん」

「ならばひとつ報告を、数ヶ月前にマフィアランドという島で戦争が起きたのをご存知ですかな!?」

「そういえばそのような事があったな」

雲のアルコバレーノ・スカルが軍団を率いて起こした戦争のことである。その後リボーン、コロネロにボコボコにされたのはいうまでもない。

「仮に被害を与えるマフィア達を『黒マフィア』、マフィアとして活動しているが地域住民を守り、被害を与えないマフィア達を『白

マフィア』とします。調べてみたところ、そのマフィアランドの制作に関わったマフィアはここ最近では事件を起こしているものはおらず、全マフィアが『白マフィア』だったそうです」

その結果方向に全員が口を閉じた。

「この世の均衡はどうすれば保たれるのだろうか」

全世界の政府の中で最も人数の多い政府・イタリア政府。このように今現在どの国の政府も似たようなことを話していた。

【日本】

「どうされました？」

「いや・・・」

先程の日本政府の若い男が一枚の写真をずっと眺めていた。

「会いに行ってみるか、ワシの大切な・・・・」

そう言って男は写真を置いた。そこに写っていたのはボンゴレ１０代目・沢田綱吉の写真だった。

標的１４　謎の男

キーンコーンカーンコーン。

「ああ～、今日もやっと学校終わったよ」

終わりのチャイムを聞き、ググッと背伸びをするツナ。最近はリボーンの指導がさらに厳しくなり、おかげで少しは学校の授業がわかるようになってきたけど、やっぱり疲れる。

「ツナ、一緒に帰ろうぜ」

とそこへ声をかけてきたのはクラスメートの山本だった。

「あれ、山本部活は？」

「今日はねえんだ」

「そっか、じゃあ帰ろっか」

「おう」

山本、そして後から声をかけてきた獄寺と3人で帰ろうした矢先、黒スーツの赤ん坊が目の前に現れた。

「リ、リボーン、学校に現れんなっていつも言ってんだろ」

「ツナ、山本、獄寺、家に帰る途中、それか帰ってからかもしれねえがおそらく1人の男がお前達の前に現れる、そいつにはアルコバレーノのこと、ボンゴレやマフィアのことはいっさい喋るんじゃねえぞ！！！」

「えっ、ど、どういうこと！？」

「話はそれだけだ、もし少しでもマフィアのことが漏れたら、お前らは生きてられねえかもしれねえぞ！！！」

いつもと違うリボーンの態度、いつもよりもさらに増した威圧感を漂わせる雰囲気にツナだけでなく、獄寺と山本までもが飲まれた。リボーンはそう言い残すと、3人の前から去った。

「へえ、そうなんだ～」

「まったくこの子ったら」

笹川京子と黒川花は学校が終わり、2人で下校していた。そこへ聞き覚えのある声が京子と花を呼んだ。

「京子ちゃ～ん、花ちゃ～ん」

偶然帰り道で京子と花の姿を見つけた三浦ハルが駆け寄って来た。

ドンッ！！

「はひっ！？」

ハルが何かにぶつかり、当たった拍子に倒れてしまった。それはいかにもゴツく、不良のような輩が数人、ハルが走ってきたと同時に死角から現れたため、ぶつかってしまったのだ。

「お～痛、どこ見て歩いてんだお嬢ちゃんよ」

「はひっ、ご、ごめんなさい！！」

「骨折しちまったかもな、それなら慰謝料もらわねえと」

「ちょっと、そんなわけないでしょ！！謝ってんだからいいじゃない！！」

と花が奮起し、不良達に立ちはだかった。だがこれがかえって彼等の怒りを買うことになった。

「ああ？なんだと！？」

「おい待てよ、こっちの娘もかわいくねえか！？」

「ひひひ、そうだな、じゃあぶつかったお詫びに付き合ってもらおうか」

強引に不良達は京子とハルと花の3人を囲み、身動きを取れなくした。
必死に不良達の手を振りほどこうとするが、体格差がありすぎるためまったく動かない。

「なあ、その辺にしといたらどうじゃな」

「ああ！？」

突然聞こえてきた声に不良達が振り向くと、そこには1人の男性が立っていた。
「なんだてめーは！？」

「その娘らも必死に謝っておる、許してやれと言っておるんじゃ」

「ふざけたヤローだぜ、何ジジイみてな喋り方してんだ！？バカにしてんのか！？」

そう、不良の言った通り、その男性は見た目は２０代前半、しかし喋り方は老人のようであった。しかもその容姿は－

「えっ・・・」

「あ、あなたは・・・！？」

「ツ、ツナ君？」

「どうでもいいがさっさと消えろ！」

ドンっと不良はツナそっくりの男性を突き飛ばした。

「ふっ、公務執行妨害で逮捕する！」

「しかし、さっきのリボーンさんの態度は何だったんスかねえ！？」

「さあ・・・」

「小僧にしちゃ、いつもと雰囲気違ったよな」

「「「！！！！」」」

その瞬間、３人の目つきが一気に変わった。

「１０代目！！」

「ツナ！」

「うん、間違いない、死ぬ気の炎だ！！」

３人は一斉にその場を走り出した。そして炎を感じた場所へ辿り着くと、そこには３人の女性と１人の男性、数人の倒れた不良達の姿

があった。

そして3人は後ろを向いている男性から目を離さなかった。

（なんだコイツ）

（すげえ殺気だ）

（一体・・何者なんだ！？）

「てめえ何者だ！？」

獄寺の言葉にその男性が振り向くと、今度はツナ達が言葉を失った。

「ワシか？ワシの名は沢田家綱、久しぶりじゃのう綱吉よ」

標的１５　沢田家綱

「沢田・・・」

「家綱？ってことはツナの・・・」

「お、おじいちゃん？」

その男はにっこりとほほ笑み、ツナの前に立った。とても優しそうな顔立ち、老人にはまったく見えない容姿、それに反するような覇気。ツナ達はそれを感じ取っていた。

（１０代目のおじい様・・だがこの異様なな感じは・・・）

（見た目は優しだが、何か引っかかるぜ・・・小僧が言ってたのって・・・）

「どうした綱吉？」

「えっ、あ・・いや・・・」

思うように言葉が出ない、むしろ今までに感じたことのない威圧感に３人は気圧されていた。

「ツ、ツナさんのおじいちゃん？」

「ツナ君のおじいさんって若いんだね」

ただ驚くハルと、天然というか、ここまで来たらド天然と言わざるを得ない京子。

一般人である2人にはそう感じたのかもしれない。

「だって、父さんや母さんからもおじいちゃんの話なんて聞いたことなかったし、それにいたことなんて・・・・」

「それはよかったじゃないですかツナさん」

「えっ？」

「だって、死んじゃってると思ったんでしょ？」

「う、うんまあ・・・」

「ハッハッハ、まあこんなところで立ち話もなんだ、綱吉の家に案内してくれ」

結局家綱に言われるがままにツナは家へと案内した。京子とハルは途中で別れ、山本と獄寺はそのままツナについて行った。家に着き、母さんに話すと母さんもやっぱり知らない様子だった。

「あ、あのいくつか質問していいですか？」

「ん？」

何故か敬語で話すツナ。家綱は何も聞かずに頷いた。

「あなたは本当にオレの祖父なんですか？それにしては若すぎる。それに・・・」

「それに・・・・なんだ？」

ゾクッ！！！

いきなり家綱の口調が変わり、その瞬間3人の体は硬直した。ツナの言うことがわかっていたような様子でもあった。

「ハハハ、まあそう硬くなるな質問の答えはこうじゃ、何故見た目が若いかというと、ある修業をしてな、そのためじゃ」

「「「・・・・・・・・」」」

やけにあっさりしすぎていて3人はポカンとしていた。

「ならワシからも質問じゃ」

再び先程のような力強い口調に戻った。

「お前達こそ・・・何者じゃ？」ゾクッ！！！

「くっ・・・・」

（やっぱりこの殺気と異様な威圧感・・・）

（そして・・・邪悪な感じ・・・）

家綱の一言一言に、そのようなことを受け取る3人。ツナはこの人を実の祖父とは一切感じなかった。獄寺と山本も同じ感じだった。

「ど、どういう意味ですか？何者って・・・」

「お前達から感じる力、そしてワシも、そして綱吉、貴様の持つボンゴレ？世の血」

「！！！！」

その言葉でツナは確信した。やはりこの人もボンゴレの末裔でることと、そして・・・・

「ワシはくだらぬマフィアの血を受け継いでいることが嫌で嫌でたまらね、だからこそ政府の人間となり、世界五大勢力の１つを担うまでになった。世界中のマフィアを滅ぼすことを誓った」

「マフィアを・・・」

「滅ぼす？」

「それにワシにとっても最悪な情報、それは我が孫がそのボンゴレの１０代目となっていることだ！！！」

「な、なぜそれを・・・」

「マフィアはすべて・・・殲滅せねばならぬ、たとえ愛する息子、孫・・・」

「「「!!!!!」」」

(来る!)

「でもな!!!!」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!!!

標的１６　ＶＳ沢田家綱

響き渡る破壊音、それは並盛全体に行き渡る程の大きい音。
家綱のリングから大空の炎が発生し、形を変えた炎がツナに牙を向いた。

「１０代目ーーーーーー！！！」

「やはり、綱吉が１０代目・・・か」

「！！！」

獄寺はハッとなって口を押さえたが、もはや遅かった。

「そしてお前達が守護者じゃな」

「「！！！」」

ほとんどわかっていたことだったが、今ので彼等はボンゴレの人間であることがわかってしまった。

「マフィアは滅ぼす、貴様らも・・・」

コオオオ！！

「ま、まさか・・・」

「こんなとこで炎を放つ気じゃ・・・」

何の躊躇もなく手に炎エネルギーを蓄えた。

「フレア・・・ん？」

「ＧＥＴＴＯ（ジェット）　ＡＴＴＡＣＣＯ（アタッコ）！！！！」

ドゴオオオオン！！！

ツナの放った攻撃を受け、家綱は後方へ吹き飛んだ。ツナはそれを追うように飛んで行った。

「１０代目・・・オレ達も行くぞ」

「ああ」

獄寺と山本もその後を追った。

（くっ、何だ今の技は、ワシの体には炎を弱めるシールドフレアを纏っいるはず・・・）

（ＧＥＴＴＯ（ジェット）の攻撃を喰らってたったあれだけのダメージ！？）

（聖天炎魔団（せいてんえんまだん）のメンバーの力ですら半減させるはずなのじゃが・・・）

（ほとんど効いていないのか！？）

（それを打ち破る力・・・か、末恐ろしいのう）

「ふっ、侮っていた、貴様の力、ワシも一般人を巻き込みたくはない、場所を変えようか」

「！！！」

辺りの景色が変わり始めた。並盛の上空だったはずの場所が、怪しげな森へと変わっていった。

「幻覚か」

そして家綱の隣に突如霧が発生した。その霧はみるみる人の形となり、実体が現れた。

「来たか、オベリスク」

「オシリスさんが呼び出すからですよ」

現れたのは少年だった。少年は家綱をオシリスと呼び、家綱は少年をオベリスクと呼んだ。

コオオオオオオ！！！

「！！！」

2人が話している間、ツナは一瞬でナッツを形態変化(カンビオ・フォルマ)させ、攻撃段階に入っていた。

「おっと、綱吉を忘れておったわ」

「あの構え、炎でも放つ気ですかね」

「だとしてもおぬしが作った幻覚空間に加え、シールドフレアを纏っておる、破られるわけ・・・」

「試してみるか」

「なんじゃと」

「ハアアアアア、XX(ダブルイクス) BURNER(バーナー)！！！」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

オオオオオオオオン！！！！！！！！

「「！！！！」」

「今のは！？」

「あそこだ」

3人を覆っていた空間がなくなり、山本と獄寺にもその姿が見えた。

「バ、バカな・・・」

「オレの幻覚空間を、完璧に吹き飛ばしただと」

「まだ、闘るのか」

「ふっ、流石・・・というべきだな」

「・・・・・・・」

「オベリスク！！！」

「はい」

再び霧が現れ2人を包み込んでいく。

「お前の勝ちだ、また会おう綱吉」

バシュウウウウウウウウ！！！

そのまま霧の中に消えていった。

「ハァ、ハァ」

「１０代目、大丈夫ですか」

「ツナ！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4244n/

新たなる戦い～第３章～

2011年10月28日12時14分発行